

Prajñākara Gupta の Dharmakīrti 理解

木 村 誠 司

ブラジャーカラグプタ Prajñākara Gupta は、ダルマキールティ Dharmakīrti の思想をどのように理解していたのだろうか。本稿は、この設問に対するごく部分的な考察である。

ブラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解に関して、チベットの学僧シャーキャチョクデン Śākya mchog ldan は、きわめて興味深い記述を残している。シャーキャチョクデンは、『量の歴史』*Tshad ma chas 'byung* という著作において、次のように述べる。

ブラジニャーカラグプタ¹⁾とラヴィグプタ Nyi ma sbas pa, Ravigupta は……量 (tshad ma, pramāṇa) についても、言説的 (tha snyad pa, sāmvyavahārika) と勝義的 (don dam pa, paramārthika) の二つのうち、〔ダルマキールティ著『量評釈』*Pramāṇavarttika* において〕説かれるべき主要なるものは、勝義的量の名を有する所取 (gzung, grāhya)・能取 ('dzin, grāhaka) の二つとして存在しない (gnyis su med pa, advaita) 智 (ye shes) であると説明し、〔ダルマキールティの〕究極的密意 (mthar thug gi dgongs pa) は中観 (dbu ma, madhyamaka) にあると説くのである²⁾。(14 a¹⁻³).

ブラジニャーカラグプタは、実際に上記の如き見解を提示しているだろうか。

ダルマキールティは、『量評釈』「量成就」*Pramāṇasiddhi* 章において、量の定義 (lakṣaṇa, mtshan nyid) を、④無撞着性 (avisamvādin, bslu med can) と⑤未知の対象を明らかにすること (ajñātārthaprakāśa, ma shes don gyi gsal byed) の二つとした³⁾。この二つの定義に関して、ブラジニャーカラグプタは、『量評釈』に対する彼の注釈書において、次のように言及している。

そのうち、これ〔⑤未知の対象を明らかにすること〕は、勝義的量の定義であり、前者〔④無撞着性〕は、言説的〔量の定義〕である。(p. 30, l. 22/Te. 26b⁴)

ここで、〔未知の〕対象という言葉によって、勝義を述べているのである。「未知の対象を明らかにする」というのは、勝義を明らかにするという意味なのである。勝義は、また二つとして存在しないことを本質とするので、それを明らかにすることだけが量なのである。(p. 30, ll. 19-20/Te. 26b²⁻³).

シャーキャチョクデンの記述は、ブラジニャーカラグプタのこの注釈に基づいた

ものであろう。

さて、シャーキャチョクデンの記述において、中観という用語は唯識 (vijñapti-mātra, sems tsam) と対比的なものとして用いられてはいないように思われる。ここで、この中観の意味を明確にしておきたい。『量の歴史』において、シャーキャチョクデンは、二種の中観を設定して、次のように言う。

この教説において、四つの学説 (grub mtha', siddhānta) の頂点となった中観は、二種生じた。すなわち、『解深密経』*mDo sde dgongs 'grel*, *Samdhinirmocanasūtra* において、転法輪の三つの次第の設定が生じ、そのうち、中間〔の法輪〕を言葉通りのもの (sgra ji bzhin pa) と設定する中観と、第三の法輪を言葉通りのものと設定する中観〔が生じたの〕である。第一〔の中観〕は、尊者龍樹 Klu grub, Nāgārjuna によって、論理の群 (rigs tshogs) において説明されたそれであり、第二〔の中観〕それは、弥勒 Byams pa, Maitreya の法に随順し、無着 Thogs med, Asaṅga によって説明されたそれなのである。その二つのうち、この〔ダルマキールティの〕流派 (lugs) では、後者の規矩それに随順し、説明の仕方は、次の如くである。『量評釈』・「知覚」Pratyakṣa 章・k. 213ab において〕「そこにおいて、一方がないことによっても、両者とも否定される。」と言われるように、始めに所取・能取の無自性を確定することによって、増益 (sgro 'dogs, adhyaropa) の辺を排斥し、〔同・k. 213cd において〕、「それ故、両者の空性なること、それが、それにとっても真実 (tattva, de nyid) である。」と述べ、二空の智なるものそれを修習 (bsgom pa, bhāvanā) によって感受すると説明することによって、損減 (skur 'debs, apavāda) の辺を排斥するのである。⁵⁾ (3b⁶-4a³)。

プラジニャーカラグプタに言及した際、シャーキャチョクデンが用いた中観は、第二の中観に相当しよう。事を明瞭にするために、以下、引用文以外の個所で中観という用語を用いる場合、唯識と対比的な思想を表わす用語としてのみ使用することにしたい。したがって、シャーキャチョクデンの第一の記述中における中観は、地の文では、唯識と呼ぶことになる。

さて、シャーキャチョクデンの第一の記述を考察してみよう。この記述は、プラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解を正しく伝えているのだろうか。少なくとも、シャーキャチョクデンの記述は、先に見たプラジニャーカラグプタの注釈を逸脱しているようには思われない。勝義の量を所取・能取の二つとして存在しない智と規定することにも無理はない。そして、何よりも、プラジニャーカラグプタとダルマキールティを共に唯識の思想家として位置付ける近代の大方の研究とも見事に符合するように見える⁶⁾。シャーキャチョクデンは、きわめて的確かつ簡潔に、プラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解を提示してい

る、と言えそうである。しかし、筆者は、シャーキャチョクデンの記述に対して、若干の疑念を抱いている。なぜなら、プラジニャーカラグプタは、『量の歴史』中にも引用された『量評釈』・「知覚」章 k. 213 に対する注釈の中で、次のような注目すべき見解を提示しているからである。

自己認識 (svasaṃvedana, rang rig pa) と他者認識 (paraṃvedana, gzhan rig pa) は存在しないと説かれるからである。それ故、空性だけが優れているというのが合理的なのである。(p. 288, l. 28/Te. 267a⁵).

筆者は、プラジニャーカラグプタの注釈の意味を、未だよく理解できないのであるが、もし、プラジニャーカラグプタが、ここで、自己認識すら否定しているのだとしたならば⁷⁾、プラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解を唯識と断定することは、かなり危険なこととなる。また、かつてシチェルパッキー Th. Stcherbatsky が、「チベットのパンディタ達の伝承によれば、プラジニャーカラグプタは、中観帰謬派 (Mādhyamika-Prāsaṅgika, dBu ma thal 'gyur pa) の立場から、『量評釈』を解釈した。」⁸⁾と述べたことをも考慮すれば、早急な結論は避けねばなるまい。したがって、的確に見えたシャーキャチョクデンの記述は、その意味内容を根本的に問い直さなければならないものとなったのである。

以上、ごく大雑巴にプラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解を考察してきた。本稿は、ダルマキールティとプラジニャーカラグプタ個々の思想を厳密に比較した上での所論ではない。今後は、この二人の独創的な思想家の差異と一致を原典に即して明らかにしていきたい。

1) テキストは rgyan gyi mkhan po「莊嚴の学者」となっている。

2) Leonard W. J. van der Kuijp, *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Alt-und Neu-Indische Studien 26, 1983, pp. 49-50 及び拙稿「チベット仏教における Prajñākaragupta に対する評価」日本西蔵学会々報、第31号 S. 60, p. 11 参照。

3) 定義④は、k. 1, 定義⑤は k. 5 で提示される。偈の訳とプラジニャーカラグタの注釈の訳については、渡辺重朗『「量評釈莊嚴」における量の定義』成田山仏教研究所紀要 第1号, 1976, pp. 367-400 参照。

4) 始めに Skt. テキスト *Pramāṇavārttikabhāṣya*, 次にチベット訳テキスト *Pramāṇavārttikalamkāra* の該当箇所を示した。

5) 前掲注 2) kuijp の著書 p. 39 に英訳と解説がある。

6) 本稿の性質上特に沖和史「『Citādvaita』理論の展開—Prajñākaragupta の論述—」東海仏教 第20号, S. 50, pp. 81-94 参照。また、プラジニャーカラグプタのダルマキールティ理解を中観派的であると証明した論文として、松本史朗「仏教論理学派の

二諦説」(上)(中)(下)南都仏教 45号～47号, 1980-82 がある。

7) 前掲注 6) 沖論文 pp.88-87 には, プラジニャーカラグプタは, 「勝義としては自己認識唯一がある。」と述べている, との指摘がある。一体, プラジニャーカラグプタは, 最終的に自己認識を認めているのだろうか。

8) Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic* vol.I, Dover Pub., Inc., p.45.

使用テキスト

- *Pramāṇavārttika* of Dharmakīrti, ed. by Y. Miyasaka, Acta Indologica I.
- *Pramāṇavārttikabhāṣya* of Prajñākaragupta, ed. by R. Sāṅkṛityāyana, TSWS. 1 1953.
- *Pramāṇavārttikalamkāra* of Prajñākaragupta, sDe dge ed., No.4221.
- *Tshad ma chos 'byung* of Śākya mchog ldan, The Complete Works vol. 19, Thimphn Bhutan, 1975.

<キーワード> 勝義的量, 言説的量, Prajñākaragupta.

(駒沢大学非常勤講師)

— 新 刊 紹 介 —

伊藤瑞穂著

『華嚴菩薩道の基礎的研究』

菊版・1129 頁・定価 18,000 円
平楽寺書店・昭和 63 年 2 月 16 日